非行少年の性格と体力・運動能力について

川村仁視　大山慈徳　原田碩三（名古屋市立大学）

A Study of The Relationship Between Parsonality And General Moter Abilities.

Hitoshi KAWAMURA, Yasunori ŌYAMA, Sekizo HARADA,

Psychic disturbances create body disturbances. Physical adnormalities have often been the cause of mental, social and emotional difficulties, therefore a regular phase of the corrective treatment applied to truancy offenders by Childrens Court's is the correction of any physical defects found.

研究の目的

最近における非行少年のすう勢を年令層別にみると，低年令層の少年による非行の増加傾向が高年令層のそれに比して著しく高いことが注目される．これは低年令の少年の身体的成熟の加速現象がみられること，家庭・社会などの非行を阻止する力が弱まっていることなどに原因するものと考えられる．

非行の原因については，犯罪社会学者はそれを主として環境の所産であるといい，精神医学者は，これを素質であるといっている．

Goddardは犯罪は精神障害であるといい，Lombrosoは犯罪者は一つの特別人種であるとして生来犯人説を主張した．Kretshmer は体質からこれにアプローチし，精神分析の専門家は意識下の心理機制と非行について認識している．しかしここでは非行は素因（生物学的諸因）誘因（社会学的な諸要因の結びつき）と動機（人間関係）の三者の結合で起るものであると考える．

知能と犯罪との関係については，Goddard の犯罪者低能説等数多くの研究がなされているが初等少年院収容生の知能指数80～95の者が全体の70%をしめることからも肯づける．

また，性格と非行の間には非常に密接な関係があり，初犯の20%，累犯者の90%以上が精神病質者であるといわれている．初等少年院収容性の矢田部ギルフォド性格検査では，D型やA型はみられず，B型，E型が多い．とくに非協調的・主観的・攻撃的・思考的外向の者や情緒の不安定な者が多い．

本研究ではかかる特性を持つ初等少年院収容生について，性格と体力，運動能力を測定し，それらの測定結果をT尺度化し検討を試みた．

研究の方法

1．調査対象

調査の対象としては，初等少年院の特性により，入退院時期に多少の変動があるが比較的その変動の少ない34名の収容生である．そのうちわけは，14才9名，15才19名，16才6名である．IQは80～95の者が全体の70%をしめている．家庭については，系類に素行の悪い者（親の飲酒癖，とばく行為などが40%，兄姉に素行不良の者が37%）が多く，84%の者が貧困家庭であり，このうち26%が生活保護を受けている．また，家族構成も複雑で，非行の温床となるべき多くの要因を含んでいる．

2．調査の手続

上記対象者に入院時，一年後の2回，体格，体力，運動能力，矢田部ギルフォド性格検査をした．

矢田部ギルフォド性格検査より情緒不安定（D・C・I・N）社会的不適応（O・Co・Ag）衝動（G・R）の三項目標準得点より5段階に分類し，体力・運動能力をT尺度化した．

結果と考察

本調査の対象とした少年院の入院生の一般的な，体格，運動能力，運動適性は（表1）に示した通りである．この表からもわかるように個人差の範囲は非常に大きい．しかし同年令の者の全国平均値及び愛知県平均値と比較してみると，入院時においては，すべての測定項目に低い値を示している．特に筋力においてその低さが目立つ．背筋力は全国平均が，131.2Kg，愛知県平均が125.8Kg，本集団は108.3Kgと大きな開きがある．また握力についても全国平均が40.6Kg，県平均は39.9Kgである。この様に本集団の入院時の筋力は，著しく低く，一

年後にかなり上昇傾向を示しているが，全国平均，県平均との差は，減少していない．

適性検査の各項目は，筋力ほど大きな開きは認められないが，いづれも低い数値を示している．しかし入院1年間の柔軟度の進歩には，著しいものがみられる．〝伏臥上体そらし〟については，全国平均は56.1cmから58.5cm，県平均は53.6cmから56.0cmの上昇であるが，本集団は，入院1年後には完全に全国及び県の平均値を上廻っている。また〝立位体前屈〟についても同様で全国平均は14.6cmから16.2cmの上昇，県平均は14.2cmから14.9cmとわづかの上昇しかみられないが，本集団においては，11.1cmから17.8cmと非常に大きな進歩を示している．これは，院内の体育指導で，特別カリキュラムを組み，徒手体操，柔軟体操等に重点をおいて指導された影響によるものと思われる．

概して少年院に送り込まれてくる少年達は，性格的なひずみを持っており，運動能力，筋力等にもこの性格特性が影響し，行動の不活発さ，元張りのきかないパワー等の面で平常の生活態度も違い，一般的な平均値を下廻ってくる結果をまねくものと思われる．しかしこの状態も，教育指導により，性格のひずみをとりのぞき，先述のような，身体活動の一面を変え得ることができると推察する．

次いでこの性格的なひずみが，どのような傾向であるのか，また性格的ひずみの差によって，運動能力，筋力等に差がみられるのであろうか，という疑問からY．G性格検査をもとに分類し（**表2**）から（**表7**）までを作成してみた．（**表2**）は情緒不安定，Y．G検査のD．C．I．Nを5段階に分類してみたものであるが，情緒的安定が普通，もしくは良いとみなされるものが，半数の50%をしめ，残りの12%は，著しい不安定を示し，38%の者がやや不安定の傾向を示している．運動能力の各項目の数値は，本集団内における各々のグループのかたよりをみるために，（Tスコアー）で表わしてみた．これをみると第2段階，情緒的安定がやや良いと解されるものの運動能力，筋力は平均より良いことがわかる．また平均的な第3段階においても平均との開きは少くむしろ上廻っているとみてよいであろう．しかし不安定傾向の強いものは，平均値を下廻る，50以下の数値を示している項目が多い．これらの傾向のものが，入院1年後には（**表3**）に示した様に変化してきた．情緒的なかたよりが少くなり，第一，第二段階に入るものがなくなり，第5段階，情緒的不安定傾向の強いものが，入院時の半数になっている．これによると情緒的なかたよりが，少くなり，平均的に情緒の安定傾向を示していると見られる．運動能力，筋力等についても同じような傾向を示し，前表と比較してみるとその差も小さくなり，かたよりも平均に近かづいてきているとみてよいであろう．

Y．G性格検査のO．Co．Agにみられる社会的不適応により分類してみると（**表4**）のようになった．社会的な不適応を強く示す様な者が20%，やや不適応と思われるものが，47%と，不適応傾向を示すものが，67%もみられる．これは本集団の特殊性でもあり，入院を必要とする少年達の傾向として当然の結果であろう．筋力についてみるならば，性格的に適応能力がある思われるものは，平均との差が少なく，上昇の傾向もみられるが，不適応傾向の強いものは，下廻っている．また運動能力の投力についても同じ傾向がみられる．あとの項目については，目立った傾向をみることはできないが，平均的な第3段階に比べて，適性その他の面でのアンバランスな傾向が強いとみてよいであろう．以上のような社会的不適応傾向が，入院1年後に（**表5**）に示すように変化した．わづかに不適応傾向を示すものが減少しているが，とり上げて変化があるといえる程ではない．運動能力その他についても同じ様な傾向である．不適応傾向を示すものの方にわづかではあるが低い数値をみることができる．また，運動能力や運動適性相互間の差は減少してきているとみてよいのではないだらうか．一応バランスのとれた運動能力，適性，筋力等が身につきつつあると解することができると思う．衝動的傾向の強弱をみきわめる，Y．G性格検査のG．Rの項について分類を試みたら（**表6**）のようになった．一般的に見て衝動的傾向が強く出て，59%の者が強い方向を示している．普通もしくは弱い傾向を示したものが非常に少い．これらの運動能力等についてみるならば，最も衝動的傾向を強く示したものは，運動能力，適性，筋力等に低い数値を示している．これは衝動的な面が測定時に影響しているのではないだろうか．この傾向が入院後一年たつと（**表7**）のように変化した．衝動的傾向を強く示すものが多くなり，70%のものがこの部類に入る．しかし運動能力等の測定値には，入院時程の差は見られないが，平均を示す第3段階よりやや低いTスコアー値を示している．特にこの衝動的な傾向は一般にみて，この年代層，（15〜才16才）には多く見受けられるので必ずしも本集団の特殊性とばかりいいきれない面をもっている．

性格的な片寄り相互の間にみられる現象は特別とりあげることは困難であるが，入院を必要とする少年の，50%以上のものが，各々の性格的ひずみの中に入っている．この少年達すべてについて何らかの性格的ひずみをもっていると解される．またそれが一年の入院期間中に，一般的性格に近ずくものと思われる．

まとめ

本調査は，少年院に入院したものを対象としたごく特殊な事例であるが，最近の青少年犯罪の激増，ならびに

年令の低下現象等と考え合せた場合，この性格的なひずみを早く発見すると同時に，早期に改良する必要を痛感する．またこの性格的なひずみが，運動動力，運動適性，筋力等に全く関係ないとはいいきれず，本調査の結果から．性格的なひずみをもつものの，運動能力，運動適性，筋力等は一般に比べて低いことは明らかである．しかしこの原因がいづれにあるかは，今回の調査では明らかでない．性格のひずみが生みだす運動能力等の低下であるのか，運動能力等が生みだす性格のひずみであるのか，明らかではない．

しかしながら我々の立場にあっては，性格のひずみは，運動能力等の個人的な身体的な原因としてとらえる必要があると思う．身体的な欠陥は，個人の性格にひずみを起させる最も初期の動機である．従って入院時の本集団は，全国平均との間に大きな開きを示し，なおかつその中で，性格のひずみの強いものがより低い数値を示していることからも，第一に身体的な運動能力，適性のアンバランス，あるいは劣等感等があるのではないか，を究明する必要があるだろう．

以上今回の調査研究により，性格特性と，運動能力との関連性は，ある程度把握することができた．しかし今回の結果については，統計的処理を充分に行なっていないため，明確に結論づけることは困難である．今後の問題として処理をしてゆきたいと思う．

最後に本研究のために御協力，御助力頂きました少年院の皆様方に中心より感謝の意を表して本論文をとじる

（表，1）　測定項目平均値　（　）内標準偏差

項目	身長	体重	胸囲	50m走	立と幅び	ハンドボール投	伏臥上体そらし	立位体前屈	腕立腕屈伸	背筋力	反復横と復び	垂直と直び	握力（右）	握力（左）
入院時	163.2 (7.29)	53.8 (7.22)	84.4 (4.17)	7.97秒 (0.47)	207.5cm (21.26)	22.9m (3.86)	50.1cm (13.18)	11.1cm (7.69)	26.8回 (9.87)	108.3Kg (21.78)	33.3点 (3.93)	39.4cm (7.07)	31.7Kg (8.07)	27.7Kg (7.89)
一年後				7.51秒 (0.43)	219.5cm (17.09)	28.2m (3.70)	62.1cm (8.83)	17.8 (5.39)	45.9回 (15.50)	129.5Kg (21.26)	38.2点 (2.84)	50.3cm (4.83)	35.9Kg (9.64)	32.8Kg (7.85)

（表2）情緒不安定傾向と運動能力（Tスコア）（一）

項目＼区分	1	2 9%	3 41%	4 8%	5 12%
50m走		49.8	50.2	49.8	50.1
立幅とび		53.7	46.9	44.6	46.1
ハンドボール投		58.9	54.2	44.2	47.7
伏臥上体そらし		37.1	53.6	51.0	42.7
立位体前屈		53.7	49.7	50.6	49.6
腕立腕屈伸		50.9	51.0	49.1	57.1
反復横とび		53.5	47.2	50.2	51.8
垂直とび		55.0	49.3	47.5	54.8
背筋力		50.8	53.0	43.9	46.8
握力 右		52.8	52.5	42.4	47.9
握力 左		55.2	52.5	48.5	50.9

（表3）（二）

項目＼区分	1	2	3 56%	4 38%	5 6%
50m走			49.4	50.0	50.9
立幅とび			47.9	50.0	56.5
ハンドボール投			51.5	47.2	52.2
伏臥上体そらし			47.7	46.0	49.9
立位体前屈			49.8	50.8	53.9
腕立腕屈伸			50.4	49.9	50.3
反復横とび			50.2	49.7	47.6
垂直とび			48.7	50.5	47.3
背筋力			52.8	46.5	50.5
握力 右			52.5	46.5	52.0
握力 左			51.4	47.1	54.1

（表4）社会的不適応傾向と運動能力（Tスコア）（一）

区分 / 項目	1	2 3%	3 30%	4 47%	5 29%
50m走		49.9	50.1	49.9	50.1
立幅とび		49.3	45.7	46.6	47.0
ハンドボール投		52.9	56.0	49.1	43.2
伏臥上体そらし		59.8	48.6	51.9	47.3
立位体前屈		60.3	49.9	49.7	53.1
腕立腕屈伸		45.0	52.1	48.9	55.1
反復横とび		46.7	52.0	50.5	46.7
垂直とび		57.9	51.2	48.4	50.0
背筋力		47.2	54.3	49.1	46.8
握力 右		46.6	53.0	47.3	43.2
握力 左		49.9	53.8	50.7	48.5

（表5）（二）

区分 / 項目	1	2 39%	3 33%	4 43%	5 18%
50m走		51.0	50.4	49.5	50.7
立幅とび		50.4	51.9	45.4	53.0
ハンドボール投		54.9	53.9	46.8	49.0
伏臥上体そらし		47.6	50.4	44.0	48.8
立位体前屈		46.6	54.2	48.0	48.5
腕立腕屈伸		53.0	50.4	49.2	51.8
反復横とび		49.4	52.0	48.4	49.4
垂直とび		68.0	55.3	41.6	53.6
背筋力		45.5	53.0	48.6	49.3
握力 右		49.7	54.9	47.3	47.9
握力 左		46.5	53.2	47.2	49.7

（表6）衝動的傾向と運動能力（Tスコア）（一）

区分 / 項目	1	2 0%	3 32%	4 53%	5 6%
50m走		50.6	50	52.7	49.5
立幅とび		45.0	43.6	51.4	47.9
ハンドボール投		52.8	50.0	52.8	47.7
伏臥上体そらし		50.2	47.0	54.4	47.7
立位体前屈		50.8	51.0	52.9	47.3
腕立腕屈伸		45.7	56.5	51.8	49.2
反復横とび		45.8	52.9	51.1	48.0
垂直とび		41.9	54.3	51.9	47.7
背筋力		49.6	51.5	52.3	46.7
握力 右		54.5	48.9	49.6	47.9
握力 左		54.2	51.2	53.6	53.4

（表7）（二）

区分 / 項目	1	2	3 30%	4 55%	5 15%
50m走			50.3	49.2	50.1
立幅とび			50.2	48.2	50.4
ハンドボール投			54.2	47.1	48.9
伏臥上体そらし			46.2	47.3	49.0
立位体前屈			49.2	51.1	48.5
腕立腕屈伸			50.5	50.5	48.6
反復横とび			47.6	51.5	50.1
垂直とび			52.9	46.7	49.8
背筋力			52.4	48.6	50.7
握力 右			53.3	48.8	47.1
握力 左			53.8	47.4	49.1

参　考・引　用　文　献

(1)　少年非行の矯正および予防に関する私見，原田碩三，市邨学園短期大学（1967）
(2)　FIRO-B Test による非行少年の対人関係　原田，鎌田，市邨学園短期大学（1970）
(3)　少年非行，樋口幸吉，紀伊国屋書店